
高いアンテナ

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高いアンテナ

【Nコード】

N3865V

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

何なのか分からない高い（たぶん）アンテナ。

その正体が知りたくて、俺達は小学生の頃、あのアンテナを目指して失敗した。

あれから6年。俺達は何となく、再びあのアンテナを目指してみる事にした。

「空想科学祭2011」（RED部門 短編）参加作品です。

山の向いづつに見えるもの(前書き)

「空想科学祭2011」(RED部門 短編)参加作品です。

何となくの文字数で5本に分けておりますので、5日間よろしくお
願いします。

午前10時の更新にしております。

山の向こうに見えるもの

ある日、山の向こうに何かが見えるようになった。

まだはつきり何なのか分からないけど、灰色をした何かが見えている。

それは小学5年生の夏の事だった。

夏休みまで、あともう少しという何となくソワソワした時期で、朝っぱらだというのに、やたら元気で煩い蝉の声に負けないように俺は大声を出した。

「あれ何だろうな？」

正面の山の向こうを指差して、隣のコウちゃんに聞いてみたものの、コウちゃんも、

「何だろうな？」

って正面を見据えたまま、オウム返しのように返してきた。

「ビルでも建ってるのかな？」

「こんな田舎にか？ そりゃ無いだろ。」

「じゃあコウちゃんは、何だっと思ってんだ？」

「・・・えーと、アンテナ？」

「それだと何かつまんないな。」

でも、俺たちには答えは解らない。

だからそれから二人して、ああだこうだと言い合って、段々と壮大な想像を膨らませてみたものの、結局何なのかは分からないという、非常に無駄な事を何度も何度も繰り返した。

それから何日かで、その何かは更に伸びた。

灰色はもっとよく見えるようになったが、どうやらあれは覆いのようで、その向こう側は一向に分からない。

謎は更に深まってしまったのだ。

人は・・・特に子供は、隠されれば見たくなくなるし、分からなければ

知りたくなる。それが子供の良い所であり、悪い所であり・・・俺とコウちゃんも十分に子供だったので、もちろんあの向こう側が知りたくてたまらず、

「あれ、何か見に行ってみようぜ！」

そう言い出すのは、当然の流れだったのだ。

「何だ、コウちゃんも同じ事考えてたんだ!？」

ただ先にコウちゃんが口にしただけで、実は俺も似たような事を考えていたのだ。

夏休みに入つてすぐ、俺たちはリュックに色々詰めて、山の向この灰色を目指した。

・・・しかし、やっぱり俺たちは子供だった。

途中で疲れるし、山に近付くと灰色なんて見えないし、方向は分からなくなるし、ウロウロし過ぎてどっちに行けば帰れるのかも分からなくなり・・・結局、夜になって困り果てていた所に、いきなり眩しい光を向けられる事になったのだ。

「君たち・・・道裕くん、孝太くんかい？」

その声をかけてきた駐在さんに発見されて、事無きを得た。

その後、どれだけ親や学校の先生に怒られたかは、想像に任せたいと思う。

とりあえず、その夏休みは、あんまり楽しくなかったとだけは言うておく。

その間にも灰色の覆いは着々と高く伸び、休みが終わった頃になつて、やっと待望の覆いが外された。

ようやく俺たちは、その正体を知る事ができたのだ。

「やった! みつくん、俺の当たりっ! やっぱアンテナじゃん!」

自慢するように派手に喜ぶコウちゃんに、俺は少しムツとしたのを覚えている。

あれから6年。

コウちゃんとは違う高校に進んだ。コウちゃんは地元で、俺は大分離れた市街地の学校に進み、学生寮で生活をするようになった。

しかし夏休みになると、今年も寮からは追い出されてしまい、仕方なくバスで何も無い実家に戻って来た・・・その早々に、原付に乗っていたコウちゃんとバツタリ出会った。

「ようつ！ みつくんじゃん、帰って来たんだ？」

「おー、コウちゃん？ ってバイク？」

オーブンフェイスのカーキ色のヘルメットにゴーグルをつけて、少し大きめの原付にまたがる彼は、

「ああ、エイプだ。カッコいいだろ？」

って得意げにニカツと笑った。

去年帰って来た時は、あんまり会ってない。

盆前に偶然会った時に「俺今バイトしてんだ！」って意気込んでそのまま慌しく行ってしまったのだが、ひよつとしたらこいつのためだったのかもしれない。

そして、蝉の声の響く、影の無い暑い道を、二人で話しながら俺の家に向かって歩いた。

最近の事を話した後は自然と過去の話になり、左斜め後ろに見える山の向こうのアンテナの話になった。

「結局あれ何なんだろうな？」

俺は足を止めて振り返った。

完全に覆いが無くなった後も、実際には謎が解けた訳ではない。

形状からアンテナだろうという事で、一応コウちゃんが勝ちを収めたものの、何のためのアンテナなのか？ そもそもあれは本当にアンテナなのかというのが本当の所である。

不思議な事に大人に聞いても、「知らない。」「気にするな。」と言われるばかりで、その正体は一向に分からなかった。

二人してアンテナ・・・らしきものを見つめてみるが、やっぱり今も答えは出ない。

「なあ、今度こそ確かめに行ってみるか？」

コウちゃんがニヤリと笑う。

「いいな、それ。」

俺もニヤリと笑い返した。

あれから6年も経って、俺たちは随分大きくなった。

あの時は無計画に突き進んで、酷い思い出になったけど、今度は絶対大丈夫だ。

事前の情報収集に、大体の位置を地図で確認しておく事だって出来る。おまけに足はコウちゃんのエイブだ。

あの頃とは、小5の頃の俺たちとは違うんだ。

しかし、実際に行動してみると、どうにもおかしい。

山の中だという事もあるのかも知れないが、家にあった地図では判然とせず。あれだけ高く大きいのだから絶対に遠くからも見え、ネット上に何らかの情報があるんじゃないかと期待したのだが、そんなものは一切無かった。

それ所か、ネットの地図にも載っておらず、地図から航空写真に切り替えても山の緑ばかりで何も無かった。

改めて大人に聞いてみても、誰もアンテナの目的も場所も知らず、その態度からは一向に関心を引いた様子も無い。

・・・妙だな。

成果が無かった事をコウちゃんにメールすると、向こうからも似たような返事が返ってきた。

やっぱり何か変だ。絶対におかしい。

「どうする？」

夜に、家から一番近い自動販売機で待ち合わせた。

正直な所、どうにも気味が悪い。

その不安を誤魔化すために、さっき買った炭酸飲料水を流し込んだが、一気に入り過ぎてむせ、涙がにじむ。最近お茶系やスポーツリンクばかりで、久しぶりに飲んだせいかな？

コウちゃんはそんな俺の様子に苦笑して、自分も炭酸飲料水を一口飲んだ。

「やっぱさー、気になるよな。」

「確かに。隠されると気になるってのはあるよな。・・・だけど、不自然過ぎて何か嫌な感じがする。」

コウちゃんの言わんとする事には何となく賛成出来なくなった。それを伝えてから、光に向かい損ねてか、こちらに向かって飛んで来た蛾を追い払った。

それ以外にもたくさん虫は群れていて、さすが田舎の山の中だと思わせた。

俺たちにとって貴重な存在の自動販売機は、虫たちにとっても貴重な光源であるらしい。

「だから、それを暴きにいかうって話だろう？」

「でも、絶対何かあるって。」

コウちゃんは更に誘ってくるが、ここまで見事に隠蔽されていると、どうにもヤバイもののような気がしなくもない。

「あれ？ みつくん怖くなったのか？」

しかし俺は、挑発的なコウちゃんの物言いにあっさり乗ってしまった。

「そんな訳あるか!？」

あれから6年も経って、随分大きくなったつもりだったけど・・・

やっぱり俺たちは、まだまだ子供だ。

山の向い側に見えるもの（後書き）

（2011・08・07）誤字訂正

夜中の探検行

次の日の夜俺たちは、こっそり家を出て昨日と同じ自動販売機に集まった。

今日も羽虫たちは元気一杯で迷惑だ。

情報収集には失敗してしまったので、状況的には6年前と大して変わってない。よく分からない場所を目指す事については、結局あの頃と何ら変わらない。しかし、徒歩からエイプに二人乗りになったのはとても大きく、飛躍的な進歩である。

借りたヘルメットを被って、小気味良いエンジン音を轟かせるエイプの後ろに乗り込んだ。

前回は駐在さんに見つかって助かったが、今回は逆に窮地に立たされる破目になる。

だから俺たちは、夜陰に紛れてこっそりと冒険に出かけた。

闇の空に浮かぶ赤いライトの光を目印にして、隣の町へ続く道の途中にある細い道に曲がった。

何故なのか分からないがその道は正しいと感じ、段々と近付いているという感覚がある。

これは既視感だろうか？

「何かここ、覚えがあるよな!？」

エンジン音と、風を切る音に負けられないように声を張り上げると、

「みつくんもか!？」

と、コウちゃんも同じように感じていた事に、俺は更に驚いた。

何となくの感覚は道が広くなって更に強まり、進めば進むほど徐々にと確信に変わっていった。

もうすぐそこを曲がれば・・・という所でコウちゃんはバイクを止め、用心深く口を開いた。

「・・・確か、ここ曲がると入り口とフェンスがあるんだよな？」
「そうだ。この道を塞いでる、ずーっとでっかいのがな。」
「その先にはでっかいアンテナがあつて、赤い光が点滅してるんだよな？」

「そう。外灯の点いた建物がいくつかあつて、その向こうにも何か色々たくさんアパートみたいな建物があるんだ。」

・・・俺たちは、どうして知っているのだろうか？

エンジンの音に紛れて話した事は、どこか霞がかったような記憶の中にある。

小5の時の冒険は、見事な失敗に終わったはずだ。俺たちは、こんな所に来た事は無いはずなのに・・・。

寒くも無いのに鳥肌が立つ。まったく気持ちが悪くて仕方が無い。

俺が先に降りると、コウちゃんはエイブを脇に寄せてエンジンを止めた。

ヘルメットをバイクに残して前に向かって歩いて行くと、道の曲がった先には記憶通りの光景があり、二人して息を飲んだ。

「ひよつとして俺たち・・・あの時にここまで来てたのかな？」

「ひよつとしたら・・・だつたりしてな。」

じゃあ・・・何故俺たちの記憶が違うんだ？

不可解な事態に空恐ろしくなり背筋がゾツとしたが、せつかくここまで来ておいて引き返せる訳が無い。

コウちゃんと顔を見合わせて無言で頷き合つと、俺たちはフェンスに手をかけてよじ登り、向こう側に飛び降りた。

目が覚めると真っ暗だった

ここがどこなのかという疑問の前に、いつ意識を失ったのか、何故意識を失ったのかすら分からない。

頬に触れる感触はひやりと冷たく、硬いザラリとしたこれは、おそらくコンクリートの物だろう。

とにかく体を起こそうとしたが、腕と足は思うようは動かず、縛られている事に気付いた。

何だ・・・一体俺はどうなったんだ？

コウちゃんはどこだ？

見回すと、離れた場所に赤い小さな光が1つあるが、他には何も見当たらない。

何かの機械の低い音が唸るように響くだけで、他には音も聞こえない。

「コウちゃんいるか？」

俺同様に、傍に転がされている事を期待して声をかけてみたものの、返事は無かった。

もし気を失っているのであれば、この暗闇の中にはどうやら俺一人だけらしい。

状況も分からず、理由も分からず、もちろん時間も分からない。

不安は膨らむ一方で、嫌な想像ばかりが頭を過ぎっては、更に不安を掻き立てる。

マジどこだよ!?

俺、今どうなってるんだ!?

「オイっ！ 誰かいないのか!？」

俺を捕まえたヤツがいるのなら、おそらく暴れるのは得策ではない。でも、ずっとこの状況に置かれている事には、とてもじゃないがもう耐えられない。

しばらく叫んで暴れて、縛られた腕がヒリヒリと痛んできた頃になつて、ブツンとマイクのスイッチが入ったような音がした。

「やあ、待たせたね。・・・君も無駄に元気が良いねえ。えーと、川本道裕くんか。おや、君も二回目なんだね。そうかそうか、仲が いいんだねえ・・・しかし良かった。もう一回猶予があるよ。今度

はあまり好奇心のままに行動しないようにね？」

おそらく前にあるであろう、スピーカーから聞こえる男の一方的な言葉に、俺は益々訳が分からなくなつた。

意味不明な内容だが、何となく良くない事を言っているのだけは理解できる。

「・・・お前は誰だ？」

しかし俺の当然の疑問には、笑い声が返された。

「知らなくていいよ、どうせすぐに忘れるんだから。」

「忘れるって何だよ？」

「川本道裕くん、赤い光が見えるかい？ ほおら、この光をじつと見てごらん・・・そう、じーっとだ。」

従いたい訳ではなかったが、目は自然と赤い光を見ていた。

「いいかい、今から音楽を流すよ？ そうすると君の目蓋はどんどん閉じてきて意識が無くなる。そして、君が次に目を開けた時には、ここに来た事、今のこの出来事をすべて忘れている。そして君はいつも通りの一日を送つたと思つてゐるんだ。ほら・・・じゃあ音楽を流すよ・・・」

そして、何となく聞き覚えのある変わったリズムの曲が流れ始めると、俺の目蓋は重くなり、次第に意識は遠くなつた。

違和感のある日常

「ほら道裕、いつまで寝てるの？ 夏休みだからってダラダラしてんじゃないの。」

母さんの怒鳴り声で起こされた俺は、自分の部屋のベッドの上で、ぼんやり起き上がると手首がヒリヒリと痛んだ。

開け放した窓の網戸の向こうからは、朝のうちの程良い風と、離れた場所で鳴く蝉の鳴き声が間断なく流れ込んでいる。こっちに帰って来てからのいつもの朝の風景だ。

ただ1つ。手首の痛みを除いては。

何だこれ？ 俺、何でここにこんな傷があるんだ？

痛む場所をじつと眺めてみれば、両方の手首がぐるりと1周、皮が剥けて赤くなっていた。

意識すればするほど痛みが気になり、痒みも感じる。

しかも身に覚えは無い・・・不思議だ。

「ねえ母さん、傷薬ある？」

「傷薬？ あるけど・・・どうかしたの？」

「ここ、手首が何か擦り剥けてんだけど・・・。」
すると母さんは急に表情を強張らせ、信じられない物を見るような目で俺を見た。

「何？・・・どうかした？」

「道裕・・・あなた変な趣味でもあるの！？ 一体どこで縛られたの！？」

縛られたって何？ 一発でその思考に辿り着く母さんこそ何者なんだ？

「・・・母さん、言ってる事おかしい。覚えは無いけど傷になったの。」

「でもこんなにくつきり、まるで適当な縄で縛ったような痕じゃない・・・。」

母さん、もう黙ってくれ。これ以上聞くと俺、母さんを見る目が変わりそうだ。

「・・・あのさ、もう喋らなくていいから傷薬だけくれ。」

独特の臭いのする軟膏を塗ってみても、やっぱり疑問が消える訳は無い。

俺、何でこんな怪我してんだろう？

始まったばかりの夏休みに、いきなりの謎。超常現象並みのこの謎を解明できれば、自由研究のレポートくらいにはなるだろうか？

いや、母さんみたいに怪しい趣味を疑われるのがオチか？

この傷をこのままにしておくのも怪しいなと包帯を巻いてみたが、これはこれでまた違う誤解を受けそうな姿に思えて、諦めて解いた前にクラブで使ってたリストバンドを出して嵌めてみると、見事に傷に当たって速攻で外した。

まさかこの夏の最中に、長袖で隠すって手段しか無いのか？

俺はげんなりした気分になって、再び布団に転がった。

・・・まったく不可解で厄介な傷だ。

久しぶりの実家はとにかく暇で、何となく携帯を弄っていたら、コウちゃんの番号が何となく引つかかった。

そういや、今年はバイトしてないのかな？

エイプのコウちゃんに会った事を思い出して、何で聞いてないんだろうと少し疑問を抱いた。

・・・あの時、何話したんだっけ？

嬉しそうにエイプを自慢していた姿ばかりが印象に残っているが、話した内容については何となくぼんやりしている。

これも不思議に思い、順に記憶を追ってみたが、途中からぶつりと途切れてしまった。

何だ俺？ 何で記憶が飛んでるんだ???

更に不可解な謎が増えた俺は、携帯のキーを連打してコウちゃんにメールを飛ばした。

あの時一緒にいたコウちゃんに聞けば、抜けている記憶が埋められるかもしれない。そして、もしもコウちゃんの記憶にも空白があるのなら、俺たちに何か起きた事になる。

『今日暇？ 暇なら会おう。連絡くれ。』

『おうヒマヒマ、じゃあ今からお前んち行くわ。』

一足飛びな返事が来て思わず吹いたが、別にまあいいかと『OK』とだけ返事をした。

「あのさ、俺が帰ってきた日・・・バス停でバッテリー会ったろ？」

「うん？ それがどした？」

手土産だと言って、コウちゃんが持参した炭酸飲料水の缶のプルタブを開けながら、俺はいきなり本題に入った。

足りない記憶に気付いてから、俺はどうも首の後ろ辺りが気持ち悪いような気がして落ち着かない。

「あの時、俺たち何を話したっけ？」

缶を傾けて俺は再び新たな違和感に気付く。最近はお茶系やスポーツドリンクばかりで、炭酸飲料は久しぶりのはずなのに、つい最近口に行っているような気がした。

「何って、最近の事話して・・・あれ？」

口を開いたコウちゃんも、妙な顔をして言葉を止めた。どうやら同じように、あの時の記憶におかしな点があるらしい。

「じゃあ、知らない間に怪我したりしてないか？」

「・・・怪我。」

「俺は、手首に・・・ほら。」

服の袖を下げて赤く皮の剥けた手首を示すと、コウちゃんは嫌そうな顔をして顔を背けた。

「や、やめ！・・・俺、血とか傷とかマジ苦手なんだけど！？・・・って、あ？でも俺も今朝起きたら肩が紫になってたんだ。」

そう言つて、Ｔシャツの袖を捲り上げて覗いた肩には、確かに赤紫色に変色し内出血を起こしている。しかもかなり大きく。

「これ、ベッドから落ちたせいかなとか思ってたんだけど・・・。」

「・・・落ちたのか？」

「いや、落ちた記憶は無いんだけどさ。落ちてても寝たまま戻ってる事があるらしいから、それかなーって思ってたんだけど・・・違うかな？」

俺は、どこか引きつった笑みを貼り付けて、頭を掻くコウちゃんに、遠慮の無い視線を向けてしまった。

それはさすがに違うだろう？普通そんだけ色変わるほどぶつければ、絶対起きるぞ？

「やっぱり何か欠けてて、知らない時間があるって事だよ。」

「はあっ？　どういう事だ？」

「理由は分からないけど、記憶が繋がらない部分があるってのだけは分かった。」

怪我をしてて、何を話してたのか分からなくて、炭酸飲料に違和感があつて、まだ他にも気付いていない何かがあるのかもしれない。

「じゃあ行こうか！！」

空になった炭酸飲料の缶を握り潰して、コウちゃんは急に立ち上がつて吼えた。

「・・・どこに？」

「もう一回やり直してみようぜ。何か思い出すかもしれないだろ？」

なるほど・・・そういう事もあるかもしれない。

振り出しに戻る

という訳で、俺たちは蝉の鳴き喚く道を再び歩いた。

一度バス停まで行き、そこから同じようにやり直してみるためだ。

コウちゃんはある時と同じくエイプを押し、俺は今回は手ぶらで歩く。

まだ正午前だというのに、既に太陽の光はジリジリと肌を焼き、じわりと噴き出す汗でシャツは張り付き、徐々に体力まで奪われているような心地がする。

「この辺までは、学校の事話してたよな？」

「そうそう、朝会でステージに上がる時、足踏み外した先生の話をしたな。」

俺の学校での実話だ。

「で、そこから小学校の時の体育館の掃除で、ステージで遊んだ話に行ったよな？」

「うん、和美ちゃんが先生にチクるから怒られたって話だ。」

同じ班のしつかり者の班長で、同じ掃除場所だった彼女は、いつも不正を見逃してはくれなかった。

「居残りでもう一回、掃除させられたよな。」

「そうそう。俺あの日見たいアニメがあつたのに、間に合わなくて悔しい思いをしたって話したよな。」

最終回の1つ前の大事な所だつてのに見逃して、最終回の内容が半分くらい分からなかった。

「それから・・・何話したんだつたかな？」

コウちゃんは足を止めて、眉間に皺を寄せて俺を見た。

「俺もここから記憶が無い。」

二人とも同じ所から記憶が抜けているという確認はできた。

しかし、忘れている内容を思い出せた訳ではなく、何故なのかという理由に繋がる物も無く、根本的な解決には至っていない。

「何だこれ？ 気持ち悪いな。」

コウちゃんが腕を摩りながら言うように、不自然過ぎて気持ちが悪い。

「何だろうな？ 俺たちここから何を話してたんだろう？」

俺は何か手掛かりが無いかと辺りを見回し、ふとある物で目を止めた。

「アンテナだ。」

「アンテナ？ ……あれか？」

アンテナを目にした途端に違和感を覚えた。頭のどこかで『あんなものにするな』という声が聞けるようなものが響く。

「コウちゃん、アンテナなんか気にするなって声みたいなのはするか？」

「……する。何かすげー嫌な気分だ。」

「ひょっとして、あれなんじゃないか？ 俺たちの抜けてる記憶って。」

たぶん昔、あのアンテナを目指して辿り着けずに駐在さんに保護された話でもしていたんだろう。

…でも、何故そんな事を忘れてるんだろう？ あのアンテナは何か特別なものなのだろうか？ 『気にするな』という声は何なのだろうか？

「あのアンテナに何かあんのか？」

「分からないけど、何かおかしいな。」

訝しげな様子のコウちゃんに、俺は慎重に言葉を返した。

「じゃあさ、確認しに行こうぜ。」

「は？」

分からない事だらけで、俺には何も確実な事を言えないというのが本音だというのに、コウちゃんは怖い物知らずの発言をしてくれる。「だって記憶が無いのも、アンテナ気にするなって暗示みたいなものも気になるだろう？ だったらさあ、やっぱりここは確認に行ってみるしかないだろう？」

不安や恐怖で躊躇するより、好奇心で行動するのはいかにもコウちゃんらしい。

「そうだな、行ってみようか。」

多少・・・いや、本当はかなり不安を感じている。しかし、今回もコウちゃんと一緒なら、俺は結構な無理でも出来るような気がした。

その翌日の昼、俺たちは近くの自動販売機の所に待ち合わせて、アンテナを指してバイクを走らせた。

コウちゃんのエイプに二人乗りで、ヘルメットも借り物だ。

昨日あれからアンテナについて色々調べてみたが、何もめぼしい物は見つからず、その事が更にアンテナの異常性を高めているような気がして、正直な所ゾツとした。

しかし、だからといって『やっぱり怖いから止めよう』なんてみつともない事なんか言える訳がない。見栄も虚勢も総動員し、平然としている風を装って、コウちゃんと普通に話せたはずだ・・・たぶん。

アンテナの方角を指すと、集落を抜けて隣の町へと続く道以外何も無い山の中をひた走る事になった。

俺が帰りに利用したバスの反対車線を行き、途中から、半分ほどの道幅の更に山の奥へと向かう道へと向かった。

「確かこつちだったような気がするんだ。」

その丁字路には『この先通行止め』以外の標識も看板も無いが、コウちゃんの言葉に俺は否定をしなかった。

俺も何となくそんな気がしたからだ。

先が通行止めだという狭い道はきれいに舗装され、山の中だということに両側に濃く茂る木々の葉が堆積したゴミも無く、明らかに不自

然だ。

そのうち道幅は倍になり、言いよの無い気持ち悪さと既視感は一層強くなった。

あとそのカーブを曲がれば、という所でコウちゃんはバイクを停めてゴーグルを上げた。俺は先に降りて辺りを見回してみたが、やっぱり見覚えがある。

無論木々の詳細まで覚えている訳ではないが、つい最近こんな景色を見たような気がして、何となく落ち着かない。

何で俺はその事を忘れていたんだ？ それがどうにも納得がいかない。

「確かさ、俺ここにこのバイク置いたんだよ。」

「うん、俺もそんな気がする。」

「で、その先曲がると入り口とフェンスあんだよな？」

「ああ。そしてその向こうに、でっかいアンテナがあるんだ。」

俺たち2人のぼんやりした記憶は、おそらく間違っていない。

ここまで来てこの記憶は段々とはっきりしたものになってきた。ただ、何かに上書きされて塗りつぶされでもしたような気持ち悪さはずっとある。

「そのフェンス登って、記憶が飛んで・・・真っ暗の部屋に一人で転がされてたんだ。」

コウちゃんは更にその先を語り出したが、やはり同じような経験をしているらしい。

「そう、赤い光だけだった。暴れて怪我して、それから男の声が出たんだ。」

「同じだな。」

「もう一回猶予があるとか、どうせすぐ忘れるとか、捉え所の無い雰囲気だった。」

飄々として、緊迫感も威圧感も無い。ただ事実を伝えて注意を促しただけの、少し楽しそうに弾む癩に触る声。

「もう一回猶予って事は、次捕まるとどうにかなっちまうって事か

「？」

「さすがに試してみる気にはなれないよな。」
そして、二人とも黙り込んだ。

「どうやって囚われたのかも、どうやって家に戻っていたのかも分からない。おまけに記憶まで操作されているなんて、そんなふざけた真似ができるのは、一体どんな恐ろしい組織なんだ？」

「もうこれは、映画や特撮の中の秘密結社や悪の組織のレベルで、現実感すら無い。」

「一体この先にあるアンテナは何なのだろう？ あのフェンスの向こうには何者がいて、何のための施設なのだろう？」

「しかし、それを知りたい反面、逃げたしたい気持ちが強いのだが、どうしても俺には『このまま帰ろう』とは言い出せなかった。」

「怖いから・・・なんて、とてもじゃないがコウちゃんに言える訳が無い。」

「だからといって、前回みたいに何も考えずに飛びこんでしまえば、同じように捕まるのがオチだろう。しかも、次はどうなってしまうか分からないという恐ろしい状況だ。」

「・・・手詰まりだ。」

「俺には良い方法なんか思いつかない。相手がさっぱり分からないのに、どうやってたらここに忍び込む方法を考えられるって言うんだ？俺はプライドを捨てて、コウちゃんに『これ以上は止めておこう』と諦める言葉を言おうとした時、コウちゃんはまったく違う事を考えていた。」

「よしっ、今度はフェンス越えずに、こっち側で騒いでみようぜ。そしたら何だかって思っ出てくんじゃないか？」

「・・・ごめん、それ絶対に俺には思いつかない。」

「あまりにもコウちゃんらしい案に思わず笑ってしまい、「何だよ？」と睨まれた。」

でも、それでこそコウちゃん、そんなヤツだから俺はずっと友達でいたんだ。

「いや、何でもない。．．．それでいい。前はフェンスを越えるまでは何も無かったんだ。」

ひよっとしたら本当に向こうから出て来るかもしれない。

それにもし何の反応も無かったならば、またその時に考えればいい。

知ってはいけない事

俺たちは、枝や石を拾い集めて、フェンスの向こうに投げ込んだ。声を限界まで張り上げて、喚き散らした。

これで何の反応も無ければ本当に無駄骨だ・・・と心が挫けそうになった頃になって、ようやく反応らしい反応が見えた。

フェンスの向こうにまで続く道の遙か先。高いアンテナの下の辺りに何かがいる。

2人して凝視してみると、その何かは白と銀で構成されているようで、眩しく光を反射していた。

それは、どうやらこちらに向かって来ているらしい。ちなみにそれほど速くはない。

ようやく姿が確認できるほど近くなると、それは白衣を着た白髪が目立つ結構な年のおじさんである事が判った。しかも、乗っているのはセグウェイだ。

白衣のおじさんは、低速ながらも見事にセグウェイを操り、俺たちが投げ込んだ石や枝を避け、フェンスのギリギリで止まった。

「また君たちかい？ 懲りないねえ・・・しかしまた派手に散らかしてくれたねえ。ちょっとここ開けるから、君たち自分で片付けておくれよ？ 僕はきれい好きだからね？」

青いフレームの眼鏡をかけた、派手なアロハに短パンのおじさんは、俺たちの返事や反応など一切気にせず、中からパネルを操作してあっさり入り口を開けた。

「ほら、早く入って入って。さっさとここを片付けておくれ。」

これは喜ぶべき状況なのか・・・それともがっかりする状況なのだろうか？

コウちゃん顔を見合わせて、お互い苦笑して言われるまま中に入

った。

『また』と言われたのだから、やはり俺たちは間違いなくここに来ている事になる。

それにこの声は、闇の中で聞いた声に間違いない。

・・・何れにしる状況は、確実に前に進んだ。

「僕はねえ、研究者なんだ。プロフェッサー原田って呼んでおくれ。」

「聞く前から勝手に喋り出した自称プロフェッサー原田というおじさんは、俺たちに片付けを要求し、まるで子供が拗ねたような口調で鬱陶しい程に急かした。いや、程なんてものじゃなく本当に鬱陶しい。」

「ほらほら早くしてよね、僕はこう見えても忙しい身なんだよ?」

「ねえ、まだなの? 僕早くデータを取りたいし、上に提出する書類も作らなきゃいけないんだよ?」

「・・・ねえ君たち早くしてよ。」

それだけ口が動くなら、お前が手も動かせ!

・・・そう怒鳴ってやりたいが、ここで下手に動くと知りたい事が探れなくなる。おまけに、機嫌を損ねて自分たちの身を危険に晒すのも得策ではない。

俺はグツとこらえていたのだが、

「うつせえ、ジジイ!」

コウちゃんはあっさりキレて、おじさんを口汚く罵り始めた・・・。

しかし、あれだけの罵声に悪口雑言。これならあっさり勢いで押せるかも・・・とも思ったのだが、向こうはのらりくらりとして一向に応えた様子が無い。

どういう精神構造してんだ、こいつ?

「ええっと、確か高取孝太くんだったよね?・・・君ねえ、この間も思っただけど勢いだけで中身が無いんだよね、もう少し歯

応えのある、面白い事を言ってくれないかなあ？ それだと僕つまんないなあ。」

疲れて肩で息をするコウちゃんのフルネームを、彼があっさり口に
して、俺はドキツとした。

恐ろしい事に、個人情報はいっかり握られているようだ。

しかもこいつは、頭のネジが1本や2本外れているような人物で、
残念ながらまともな会話は期待できそうにない。

「ほら、そっちの君・・・えーつと川本道裕くんだったかな？ 川
本くんもボーっとしてないで手を動かしたまえ。」

このふざけたおじさんのペースに乗せられて忘れかけていたが、俺
たちが危険な状況に置かれている事に変わりはないようだ。

石や枝を集めて可燃物の袋に入れ、おまけに箒で掃かされた後、プ
ロフェッサー原田というおじさんはペラペラと喋ってくれた。

・・・そう、俺たちが尋ねなくてもペラペラと。

「このアンテナはね、僕が研究している洗脳電波の実験用だったん
だ。今は国も認めてくれるようになったからね、たくさんお金も出
してくれるし、日本全体に届くように更に大きな物にしてくれたん
だ。おかげで今僕は快適に研究に没頭する事が出来るようになった
んだ。まあ、それで国からお願ひされた事もしなきゃいけないけど、
概ね僕は快適だね。」

・・・今俺たちは、とんでもない事を聞いてしまった気がする。し
かも、国家レベルのやばい内容だ。

つて、まさか国が認めたのは・・・？

「あ・・・俺たち、もうそろそろ帰ろうと思うんですけど・・・。」

アンテナの正体は分かった。

俺たちの記憶におかしな点がある理由も分かった。

もうこの場にいる理由は無いし、本当にヤバイ代物である以上、さっさとこの場から離れなくてはならない。

「何言ってるの？ 帰るってどこに？」

しかし、やはりそう上手くは行くはずも無い。

「そりゃ、家に決まってるんだろ？」

俺は、コウちゃんの言葉を急いで引き継いだ。ここで彼を怒らせるような事を言うのは、命に関わるような事態になりかねない。

絶対にここは、そういう施設だとしか考えられない。

「も、もちろん家にですよ。遅くなると家族も心配しますし。」

俺は強張る頬を必死に笑顔にして自然を装った。実際、できていたかどうかは判らないが、頑張るだけは頑張った。

「今日は色々迷惑かけてすみません、アンテナの事まで教えてもらって、ありがとうございます。」

けれど彼は、嬉しそうにニヤニヤと笑い、恐ろしい事をさらりと、さも何でも無い事のように言ってくれた。

「君たちにはもう、帰る場所なんか無いよ？」

俺たちは一瞬何を言われたのか分からず、ただ呆然と彼を眺めた。

すると、再び腹の立つ可笑しそうな笑い声を立て、絶望的な内容を説明してくれた。

「このアンテナは、洗脳電波を発してるって言ったよね？ 君たちの存在は、もうこの世界には存在しないんだよ？」

「ちよつと待て！！ 何言ってるやがんだクソジジイ！！？」

「君たちがここに来てから随分経つでしょ？ その間に僕が何も無いと思うの？ 君たちはチャンスが無駄にしたんだから、それは仕方が無いよね？」

・・・俺たちは、既に最悪の事態に陥っていたらしい。しかもそれは、まったく訳の解らない勝手な理屈で。

この後、俺たちの身に起きる事は、想像したくも無い。

「・・・い、いやだ、こ、殺さないで・・・くだ、さい。」

俺はあまりの恐怖に体中が震え、まともに声を発する事もできな

った。

なのにこのジジイは更に笑う。

「まさか、殺すなんてもつたいない事しないよ。良い検体が手に入ったんだ、電波が効きにくい君たちの事はちゃんと調べないとねえ。他にも君たちみたいなのが時々いるんだよ。今後の参考にしたいんだよねえ。それに僕は、結構人道的な人間なんだよ?」

嘘だ。人道的な人間が、人を無断で実験体にしたり、人を操ったりするものか!!

「でも、もうあんまりこの人間増やしたくはないんだよね。でも、君みたいに面白い子は是非傍に置いておきたいなあ。若い子と話をして、新鮮な気分になるのも悪くないからね。」

彼は一人でそう喋りながら、ポケットを探り手の平に載る程の大きさの何かを取り出した。

そして、彼が蓋を外しボタンを押すと、俺の意識は段々と遠退き、体から力が抜けてゆく。

「さて。誰か呼んで、この子たちを運んでもらわないとなあ。」

地面に倒れた痛みの後で最後に耳に届いたのは、緊迫感も何も無いプロフェッサー原田の呟きだった。

目が覚めると見慣れた寮の部屋だった。

俺はいつものように、朝食を取って身支度を済ませた。

これから俺は、徒歩で敷地内にある研究所へと向かうのだ。きつと今日も忙しい。

あのプロフェッサー原田の助手をしなければならないのだ。

俺はまだまだ若く、全然大した事も出来ないのに妙に気に入られてしまい、嬉しい反面、実は困惑している。

プロフェッサー原田の研究は国も認めている一大事業で、皆が幸せに過ごせるように、幸せになれる電波を放つのだ。

全てが見える事、全てを知る事が必ずしも良い事ではない。見えな
い方が、知らない方が良い事なんてのは、この世界にはたくさんあ
る。

プロフェッサー原田はそのための手助けをしているのだ。

途中、ここで働くたくさんの人達とすれ違う中で、幼馴染のコウチ
やんに会った。

彼もプロフェッサー原田の思想に賛同して、ここで働いている一人
だ。

しかし俺とは部署が違い、整備点検の役に着いている。

「おはよう」と、手を上げると、向こうも「うっす」と返事を返し
た。

そうだ、もし今日早く上がれば、どこかに遊びに行こうと誘って
みよう。

この広大な施設の敷地内には何でも揃っている。まるで一つの町の
ように多くの人が暮らすこの場所には、もちろん多くの店も存在す
る。

食料品に衣料品、本やゲームにホビーの類、病院や薬局、役所の出
張所もちゃんとあり、当然食べる店に、飲む店に、俺はまだ知らな
いが、大っぴらにできない怪しい大人の店もあるらしい。

しかし、あの気まぐれで我が侘な人のおかげで、俺の生活はなかな
かにハードだ。

ちゃんと時間にも上げられるかどうかは、その日その時にならなければ
分からない。

お互いに「頑張れよ。」と声をかけて分かれ、俺たちはそれぞれの
職場に向かった。

俺は、プロフェッサー原田の手助けが出来る事を光栄に感じている。
・・・その人物には相当の疑問を感じるけれど。天才とはそういう

ものなのかもしれない。

そう苦笑しながら、白衣を纏った。

今日あの人は、一体何を言い出すのだろう？ 少し怖いけど半分楽しみにしている自分もいて、随分と心酔してしまったものだと、もう一度苦笑した。

知ってはいけない事(後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

これは「空想科学祭2011」に参加の作品ですので、

<http://sfesta2011.tuzikaze.co.jp/>

内の掲示板の方へ感想、ご指摘よろしくお願い致します。

(2011.08.07) 誤字訂正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3865v/>

高いアンテナ

2011年8月9日05時59分発行